Bulletin of Tsukuba Developmental and Clinical Psychology, Vol.15 2003

〔原著〕

児童・生徒における妬み感情喚起場面の諸側面

筑波大学博士特別研究員：澤田　匡人

Some aspects of envy provoking situation in elementary and junior high school pupils

Masato Sawada

問題と目的

妬み（envy）については，古くは精神分析学の立場から生得的感情として，そして1980年代以降は社会心理学の立場から対人的感情として，その役割や機能に関する研究が盛んに行われてきた。とりわけ後者の立場は，Festinger (1954) の社会的比較理論を発展させた自己評価維持モデル (Tesser, Campbell & Smith, 1984；Tesser & Collins, 1988) の影響を受けたものが多く，主として成人の妬みに関する数々の知見を提供してきた（たとえば，Parrott & Smith, 1993；Salovey, 1991；Salovey & Rodin, 1984, 1985)。一方，青年期以前の子どもの妬みに関しては，精神分析学の領域において幼児期の妬みが重要視され，理論的検討が積み重ねられてはいるものの（たとえば，Klein, 1975)，実証的な研究対象として取り上げられることは少なかった。

しかし，近年，子ども同士のいじめや様々な問題行動の背景に作用している要因として，妬みが注目されてきている（土居・渡部，1995；阪井，1989)。たとえば，良い成績をとった生徒をみて，自分もそうなろうと努力することが失敗に終わると，今度はその優秀な生徒を“むかつく”といっていじめるようになるという (阪井，1989)。また，このように自分よりも成績が良いものをいじめるという子どもは，いじめ全体の2割以上を占めていることが報告されている（森田・清永，1994)。したがって，すべてのいじめが妬みに起因しているわけではないにせよ，少なくともその一部は妬みによってもたらされているのではないかと考えられる。そのため，従来のような成人の妬みだけではなく，子どもの妬みにも焦点を当てて研究していくことは，子どもの問題行動のメカニズムを解明する一助となるだろう。しかし，子どもの妬みを本格的に扱った研究は，国内外を含めほとんど見当たらず，未開拓の分野であるといえる。そこで本研究では，子どもの妬み感情に関する研究を進めて行く上で基礎となる知見を得るために，実際どのような場面で妬みを感じ，どのように行動しているかを明らかにすることを目的とする。

さて，妬みを扱う際に，何らかの点で自分が相手に及ばない場合に生じる感情，思考，行動と広く捉える立場がある（たとえば，Hupka & Zaleski, 1990；Salovey & Rodin, 1985)。しかし，一般的に妬みとはネガティブな感情を指すと考えられており（Parrott, 1991；Smith & Whitfield, 1983)，感情に限定した定義を行う研究者も少なくない。たとえば，“自分以外の人が何か望ましいものをわがものとしていて，それを楽しんでいることへの怒りの感情”（Klein, 1975)，“幸福，成功，名声，望ましいものを所有している他者の優位に対する不満と悪意” (Schoek, 1969)，“他者の幸福に対する屈辱感と悪意”（Lieblich, 1971）など，妬みの感情的な側面を強調した定義が散見される。こうした定義に共通しているのは，(1)他者が，(2)自分よりも優れている（あるいは，自分が持っていないものを所有している）状況にあることに対する，(3)不快感情，という３つの点である。そこで本研究では，こうした一連の定義や日常的な使用法に基づき，妬みの感情的側面（以下，「妬み感

情」）を“他者が自分よりも何らかの点で有利な状況にあることを知ることによって生じる不快な感情反応”と定義した。

では，こうした妬み感情は，一体どのような場面で喚起されるのであろうか。自己評価維持モデル（Tesser et al., 1984）やSalovey（1991）の妬みの社会的比較理論に依拠するならば，妬み感情が感じられる場面とは次のように捉えられる。すなわち，自分にとって望ましい（あるいは，重要な）領域において，他者が優れた遂行を成したことを目の当たりにする場面である。そのため，こうした場面は当人にとって望ましいと思われる領域の数だけ存在すると考えられる。Salovey & Rodin（1985）は，成人の妬み感情が喚起される領域として，「学校・職場」，「家族」，「友人」，「恋愛」などを取り上げている。しかし，とりわけ学校を主な生活の場としている子どもたちは，単に「学校」領域とだけでは表現できない，より細分化された領域について妬み感情を感じている可能性がある。妬み感情が喚起される前提には他者との比較，すなわち社会的比較が挙げられるが，たとえば，小学生を対象とした調査では，「成績」や「運動」などの領域について社会的比較が行われやすいことが明らかにされている（外山，1999）。また，小学生の妬み感情を直接検討した数少ない実証的研究（Bers & Rodin, 1984）では，「読書」，「算数」，「美術」など，学校生活において頻繁に見られる領域が設定されている。このように，妬み感情が喚起されるような領域は多様である一方，学校生活に深く関連した特徴的な領域の存在も示唆されている。しかし，従来の研究では，子どもが実際に妬み感情を感じた経験に関する調査は実施されておらず，子どもの妬み感情が喚起される領域が十分に網羅されているとはいえない。したがって，子どもが日常生活の中で，どのような領域について妬み感情を感じているのかを検討しておく必要がある。

ところで，妬みが喚起される場面においては，相手が自分にとって望ましい領域で優れていることを知ると同時に，自分は優れていないことを否応なく突きつけられる。そのため，当該場面で“自分が優れていない”という点に注目されるならば，妬み感情喚起場面とは，自分の欲求や目標が満たされてないストレス状況の一つであるといえよう。一般に，ストレス状況下では，様々な対処方略（問題解決型・情動焦点型）が選択されると考えられている（Lazarus & Folkman, 1984）。嘉数・井上・上里・島袋（1996）は，小学生におけるストレスの対処として，攻撃や遊びといった気晴らし的な方略が用いられやすいことを報告している。同様に小学生は，情動的焦点型の回避的な対処を用いることが多いことも明らかにされている（大竹・島井・嶋田，1998）。このように，小学生の段階で既に，様々な対処方略が用いられていることを考慮すると，妬み感情が生じた場面においても，何らかの方略が選択されていると考えられる。

そこで本研究では，児童・生徒が実際に妬み感情を喚起した場面に関する事例を収集・整理することで，妬み感情喚起場面の諸側面を探索的に検討する。具体的には，得られた事例それぞれについて，妬み感情を抱く契機となった相手（人物），その他者が優れた遂行を成していた領域，そして，当該場面で当事者が選択した行動（対処方略）という3つの側面を取り上げる。

方　法

被調査者　茨城県下と栃木県下の公立小学校に通う2年から6年生の児童42名（男子16名，女子26名），および公立中学校の1年から3年生の生徒108名（男子63名，女子45名），計150名。内訳は，小学2年生2名，小学3年生3名，小学4年生7名，小学5年生12名，小学6年生18名，中学1年生38名，中学2年生25名，中学3年生45名。調査時期は，2000年5月中旬から6月初旬。

手続き　妬み感情喚起場面の詳細な事例報告を得るために，私立の教育機関の個室で，半構造化された面接が実施された。面接はすべて著者本人が行い，その内容は被調査者の許可を得て録音された。面接は以下のような手順で行わ

れた。

(1) 妬み感情喚起場面の想起：日常生活において，実際に妬みを感じた場面に関する詳細な報告を求めた。面接中は，被調査者の語彙力の差に配慮し，かつ回答する際の防衛をできるだけ避けるために，「妬み」や「うらやみ」といった言葉の使用を極力控えることとした。そして，Haslam & Bornstein (1996) を参考にして，本研究における妬み感情の定義に基づき次のように質問した。“あなたがいままでに，友だちやきょうだいが自分よりもいい思いをしているのを見て，嫌な気持ちになったときのことを，できるだけ詳しく思い出して話してください”。

(2) 妬み感情の対処方略の想起：想起された事例ごとに，嫌な気持ちを感じた後に実際に行われた行動についての報告を求めた。

以上の手続きを事例が想起されなくなるまで繰り返し行った。なお，事例の想起がなされなかった場合は，簡単な例を話して想起を促した。被調査者一人当たりの面接時間は10分程度であり，事例の報告数は1－14個の範囲（平均2.6個）であった。

結果と考察

各側面の分類

最終的に376事例[1]を収集し，当人が妬み感情を抱いた相手（以下，「人物」），領域，対処方略の3側面に注目しながら整理・分類した。得られた領域と対処方略については，KJ法を援用して整理し，最終的に領域は8種類，対処方略は16種類抽出した。

なお，著者が上記の手続きによって事例を整理・分類してカテゴリーを設定した後，8つの領域と16の対処方略の内容について説明を受けた心理学専攻の大学院生2名が，領域・対処方略それぞれのカテゴリーに関して全事例の評定を行った。2名の評定の一致率は，領域カテゴリーが93.5%，対処方略カテゴリーが96.5%であり，不一致事例については，協議の末いずれかの分類カテゴリーに含めるか，「その他」に振り分けた。

人物カテゴリー　自分と類似した他者に対して妬み感情が抱かれやすいとの見解（Salovey, 1991）に基づき，教示では“友だちやきょうだい”と限定して事例報告を促した。しかし，得られた事例の中には，「友人」と「きょうだい」に該当しないものが見られた。そこで，妬み感情を感じる契機となった相手を「人物」カテゴリーとして改めて整理・分類した結果，「友人」，「きょうだい」の他に「知り合い」カテゴリーを抽出した。「知り合い」とは，事例報告の中で直接「知り合い」として表現された人物，あるいは“友人ではないが顔見知り程度のクラスメイト”や“親戚の子ども”として言及された人物が含まれている。

領域カテゴリー　Table 1に，各領域に該当する事例報告の一部を示した。“頭が良くて，テストの点数が良い”，“友達とテストの点を見せ合って自分だけ悪かった”といった事例については，これらをまとめて「成績」領域とした。“相手が自分より走るのが速かった”，“少年野球で，友達が内野手だった”などは，「運動」に分類した。成績や運動以外での達成場面（たとえば“図工の絵で，友達が文化祭に入選した”，“テレビゲームをやっていて，友達の一人が高得点をとった”）については，一括して「技術」とした。一方，“いとこの金持ちがカードを持っていた”，“お小遣いの額で競い合って，自分が一番少なかった”といった所有物に関するものは「財産」領域とした。また，“いつも友達に囲まれているような人”は「人気」，“一人だけ先生に気に入られている子がいて，集中してほめられている”は「評価」とした。「環境」と「身体」については，次のような基準で分類した。すなわち，“他の友達には弟や妹がいる”，“田舎

(1) 単一事例で複数の領域や対処方略について言及されていた事例（領域8事例，対処方略11事例）は，1事例でも複数の領域・対処方略を示す事例として別個にカウントした。その結果，最終的に，領域カテゴリー事例数は386，対処方略カテゴリー事例数は387となった。

Table 1　各領域カテゴリーの事例報告の一部

領域	事　例
成　績	"頭が良くて，いつもテストの点数が良い" "友だちと実力テストの点を見せ合って自分だけ悪かった"
運　動	"相手が自分より走るのが速かった" "少年野球で，友だちが内野手だった"
財　産	"いとこの金持ちが遊戯王カードを持っていた" "お小遣いの額で競い合って，自分が一番少なかった"
技　術	"図工の時間に友だちの描いた絵が，文化祭で入選した" "テレビゲームをやっていて，友だちの方が高得点をとった"
評　価	"一人だけ先生に気に入られている子がいて，集中してほめられている" "弟と喧嘩したときに，いつも母は弟でなく自分を叱る"
環　境	"他の友だちには弟や妹がいる" "親戚の子はディズニーランドに自分よりも沢山行っている"
人　気	"いつも友だちに囲まれているような人" "友だちから好かれる性格をしている"
身　体	"身長が高い" "怪我をしていて自分だけ体育ができなかった"
その他	"順番で待っていたのに，いつまでも遊んでいる人がいて遊べなかった" "他人に流されない人"

Table 2　各対処方略カテゴリーの内容

対処方略	内　容
自助努力	問題解決に向けて積極的に努力する
無行動	具体的な行動を何もおこさない
依頼要求	他者に問題の解決を要求する
賞　賛	相手を直接ほめる
助言希求	他者に相談し，助言を受けて問題解決に臨む
気分転換	問題とは全く関係ないことをして気を紛らわす
断　念	何も行動をおこさず，仕方がないと諦める
対人発散	第三者に不満をぶつけるなどして八つ当たりする
相手からの回避	相手と話さないようにしたり，無視したりする
長所への注目	自分の他の長所に目を向ける
共感希求	問題や自分の気持ちを他者に話して，慰めてもらう
重要性の再評価	問題が自分にとって重要でないと考え直す
下方比較	自分より劣る第三者をみつけて，それと比較する
身体的攻撃	相手に直接攻撃を加える
誹謗中傷	相手の悪口を流布する
対物発散	物を壊すなどして八つ当たりする

注）「他者」とは，自分より優れた相手，あるいは第三者のいずれか両方を示す。

に住んでいる"，"友達のお母さんは優しい"，"ディズニーランドにたくさん行っている" などのように，自分の力ではどうにもならない状況に規定された領域を「環境」，"身長が高い"，"怪我をしていて自分だけ体育ができなかった" というように，体格・健康など身体的な状態について言及された領域を「身体」とした。

対処方略カテゴリー　領域カテゴリーの分類と同様にＫＪ法を援用すると同時に，成人における妬み感情の対処方略を扱った先行研究（Salovey & Rodin, 1988；Vecchio, 1997）を参考にして，16種類の対処方略カテゴリーを抽出した（Table 2 参照）。

各側面の学校段階差

人物・領域・対処方略に関する各カテゴリーに言及したか否かで群分けし，独立性のχ^2検定を行った。さらに，言及人数の偏りが有意であったカテゴリーについては，Harbermanの調整された残差を用いた残差分析を参考にして，学校段階差を検討することとした。なお，各カテゴリーの中で期待度数が5未満のセルがあった場合は，χ^2検定ではなくFisherの直接確率計算を用いた（たとえば，領域カテゴリーの「人気」と「身体」など）。

人物　Table 3は，学校段階別にそれぞれの相手カテゴリーに言及した群のみの人数を示している。人物カテゴリーでは，「友人」のみで言及人数に有意な偏りが見られた（$p=.042$）[2]。調整された残差を参考に「友人」カテゴリーの傾向をみると，中学生よりも小学生の方が言及人数が多かった。なお，「きょうだい」や「知り合い」の言及人数の偏りは認められなかった。こうした結果から，小学生では妬みの相手の大部分がクラスメイトなど「友人」に限られるのに対し，中学生になると，徐々に友人に留まらない相手に対しても好みを感じるようになるのではないかと考えられる。

領域　Table 4は，人物カテゴリーと同様に，それぞれの領域カテゴリーに言及した人数を集計したものである。χ^2検定を行ったところ，2つの領域カテゴリーで，言及人数に有意な偏りが見られた（「成績」（$\chi^2(1)=8.02$, $p<.01$），「運動」（$\chi^2(1)=4.32$, $p<.05$））。残差分析の結果，「成績」について言及した者は，小学生より中学生に多く，逆に「運動」では，中学生よりも小学生の言及人数が多かった。このような傾向が見られた理由として，両領域に対する小・中学生間の関心の強さの違いが想定できる。まず，「成績」という学習能力に関する領域では，小学生よりも中学生の方が妬みを感じたと報告する者が多い傾向にあった。中学生は多くの定期テストや高校受験などを控え，小学生に比して成績について強く意識せざるを得ない。そのため，成績についての社会的比較が頻繁になり，結果的に妬みを感じる者が中学生に多いのではないかと考えた。次に，「運動」といった身体的な能力については，中学生より小学生の方が関心が高いことが影響して，妬みを感じることが多かったのではないかと考えた。なお，外山（1999）の調査においても，小学生は成績や運動で頻繁に社会的比較を行うと回答しており，本研究の結果と良い対応関係にあるといえよう。

Table 3　人物カテゴリーの言及人数

人物	学校段階 小学生 [42]	学校段階 中学生 [108]	合計 [150]
友　人	41 (2.17*)	92 (−2.17*)	133
きょうだい	9	31	40
知り合い	5	9	14
その他	4	5	9

a) 上段は人数（[ ] 内は合計人数）。
b) 下段（ ）内は調整された残差。
*$p<.05$

Table 4　領域カテゴリーの言及人数

領域	学校段階 小学生 [42]	学校段階 中学生 [108]	合計 [150]
成　績	18 (−2.83**)	67 (2.83**)	85
運　動	27 (2.08*)	49 (−2.08*)	76
財　産	22	48	70
技　術	11	21	32
評　価	6	10	16
境　遇	5	9	14
人　気	4	10	14
身　体	1	9	10
その他	2	5	7

a) 上段は人数（[ ] 内は合計人数）。
b) 下段（ ）内は調整された残差。
*$p<.05$, **$p<.01$.

対処方略　Table 5は，学校段階別に各対処方略カテゴリーに言及した人数のみを示している。χ^2検定の結果，2つの対処方略カテゴリー

(2)　全体の25%に期待度数が5に満たないセルが見られたので，分析にはFisherの直接確率計算（両側検定）を用いた。

Table 5　対処方略カテゴリーの言及人数

対処方略	学校段階		
	小学生 [42]	中学生 [108]	合計 [150]
自助努力	24 (2.02*)	42 (−2.02*)	66
無行動	19	35	54
依頼要求	11	19	30
賞　賛	9	17	26
助言希求	14 (3.42**)	11 (−3.42**)	25
気分転換	7	9	16
断　念	5	10	15
対人発散	2	9	11
相手からの回避	5	4	9
対物発散	2	5	7
長所への注目	2	5	7
共感希求	1	5	6
重要性の再評価	0	5	5
下方比較	2	2	4
身体的攻撃	2	2	4
誹謗中傷	2	2	4
その他	4	8	12

[a] 上段は人数（[ ] 内は合計人数）。
[b] 下段（ ）内は調整された残差。
*$p<.05$, **$p<.01$.

の言及人数に有意な偏りが見られた（「自助努力」（$\chi^2(1)=4.08, p<.05$），「助言希求」（$\chi^2(1)=11.66, p<.01$））。残差分析を行ったところ，両カテゴリーともに，中学生よりも小学生の方が言及人数が多かった。「自助努力」とは自ら問題解決に向けて従事する方略であり，「助言希求」とは，妬み感情を感じる契機となった相手や，第三者にアドバイスを求める方略である。これらはいずれも Lazarus & Folkman (1984) のいう問題焦点型の対処方略に該当すると考えられる。したがって，小学生では，妬み感情を対処する際に，具体的な努力など問題焦点型の建設的な方略を選択するものが多いことが明らかになった。

一方，情動焦点型の対処についても，「気分転換」や「対人発散」などのカテゴリーが抽出されており，他のストレス状況下と同様に，子どもでも選択されていることが示された。また，有意な差はみられなかったものの，「重要性の再評価」を用いると報告した小学生は一人もいなかった。これは，認知的処理を要する回避的な対処は，小学生ではあまり選択されないことを示唆している。したがって，小学生に妬みを感じてから即座に努力すると答えるものが多かった一因として，「重要性の再評価」などの認知的で回避的な対処が有効であるとの知識を，多くの小学生は持ち合わせていなかったことが挙げられる。すなわち，中学生と比べて小学生では妬み感情に対して認知的な対処ができないために，とりあえず当面の努力に結びついたに過ぎず，必ずしも妬み感情がポジティブな動機づけに結びつきやすいとはいえないと推察できる。

なお，領域と対処方略の組み合わせによって人数の偏りがみられるかに関しては，人数が少なかったために今回は扱わなかった。今後，十分なサンプル数を確保した上での検討が望まれる。

まとめと今後の課題

本研究では，児童・生徒が日常生活で妬み感情を感じる場面を収集し，人物，領域，対処方略という3つの側面から整理・分類を行った。その結果，妬みの対象となる人物については，「友人」や「きょうだい」が多いことが示された。この理由としては，面接に際して，妬みを感じる相手の例として友人かきょうだいに限定した教示を用いたことが挙げられる。しかし，「友人」に言及したものは，本研究の調査対象とされた150名中133名に上っており，教示で操作したとはいえ，やはり妬みの相手として選ばれる者の大半は「友人」であるといえよう。このことは，子どもの妬み感情を扱っていく際に，「友人」に焦点を絞りながら，様々な要因を組み込んで検討していくことが実情に沿っており，かつ有効であることを示唆している。また，学校段階差を検討したところ，中学生になると小学生よりも「友人」を妬む者が少なくなることが示唆された。したがって，中学生以降になると，「友人」以外の人物に対しても妬み感情を感じられるように変化していくことが予想される。

今後は，教示などを工夫しながら，より広範囲の学校段階のサンプルを対象とした調査によって，加齢に伴う妬み感情を抱く相手の変化に関する詳細な検討が期待される。

妬み感情の喚起領域については，学校生活に深く関わっているもの（「成績」，「運動」，「評価」など）が大部分を占めていた。一方，「財産」や「境遇」など，必ずしも学校生活には関連しない領域の存在も確認され，こうした多岐に渡る領域で子どもは妬み感情を感じていることが明らかになった。

では，様々な領域全てを通じて同じように妬み感情が喚起されているのであろうか。Mikulincer, Bizman, & Aizenberg (1989) は，成人では帰属される次元の違いによって，喚起される妬み感情の強さが異なることを報告している。すなわち，相手が自分よりも優れた場面では，運や課題の困難度（外的な帰属）よりも能力や努力（内的な帰属）を原因と考えられた場合に，妬み感情が喚起されやすいという。こうした帰属を左右する要因として，領域の性質そのものが挙げられる。たとえば，「成績」や「運動」は能力に関する領域であるため，必然的に内的に帰属されやすく，「財産」や「境遇」は運に近い要素が含まれているため，外的に帰属されやすいと考えられる。そのため，結果として領域の違いによって妬み感情の喚起されやすさが異なるかもしれない。今後は，領域の性質の違いを明らかにした上での検討が必要になるだろう。

妬み感情喚起後に選択される対処方略については，成人を対象とした先行研究（たとえば，Vecchio, 1997）と類似したものが抽出された。そして，努力のような建設的な方略の選択は小学生に顕著であることが示された。本研究のこうした結果から，少なくとも小学生の妬み感情は，従来の指摘されているような問題行動を導くというより，むしろポジティブな行動に繋がる場合が多いといえよう。しかし，中学生になるとこうした傾向は弱まっており，その理由として認知的な対処のレパートリーの増加が予想される。また，本研究では面接を用いたため，社会的望ましさの影響を受けやすかったと考えられる。そのため，全体的に“がんばる”などのポジティブな方略を用いたと答えるものが多かった一方で，問題行動に該当するようなネガティブな対処方略に関する報告が少なかったのではないだろうか。そこで今後は，本研究で得られた知見に足がかりにして作成された仮想場面や具体的な場面を用いて，認知的な方略やネガティブな方略の選択要因や発達的変化を明らかにしていくことが望まれる。

引用文献

Bers, S. A., & Rodin, J. 1984 Social-comparison jealousy: A developmental and motivational study. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 766–779.

土居健郎・渡部昇一 1995 いじめと妬み――戦後民主主義の落とし子―― PHP 研究所

Festinger, L. 1954 A theory of social comparison process. *Human Relations*, **7**, 117–140.

Haslam, N., & Bornstein, B. H. 1996 Envy and jealousy as discrete emotions: A taxometric analysis. *Motivation and Emotion*, **20**, 255–272.

Hupka, R. B., & Zaleski, Z. 1990 Romantic jealousy and romantic envy in Germany, Poland, and the United States. *Behavior Science Research*, **24**, 17–28.

嘉数朝子・井上 厚・上里真喜子・島袋美津恵 1996 児童の対処行動と統制感――社会的経験との関連で―― 琉球大学法文学部ヒューマンサイエンス，**2**，57－68.

Klein M. 1975 Envy and gratitude. In Envy and gratitude and other works, 1946–1963. London: Hogarth Press. Pp. 176–235. (Original work published 1957).

Lazarus, R. S., & Folkman, S. 1984 Stress, appraisal, and coping. New York: Springer.

Lieblich, A. 1971 Antecedents of envy reaction. *Journal of Personality Assessment*, **35**, 92–98.

Mikulincer, M., Bizman, A., & Aizenberg, R. 1989 An attributional analysis of social-

comparison jealousy. *Motivation and Emotion*, 13, 235-258.

森田洋司・清永賢二　1994　新訂版　いじめ——教室の病——　金子書房

大竹恵子・島井哲志・嶋田洋徳　1998　小学生のコーピング方略の実態と役割　健康心理学研究，11，37－47.

Parrott, W. G.　1991　The emotional experiences of envy and jealousy. In P. Salovey (Ed.), The psychology of jealousy and envy. New York: Guillford Press. Pp. 3-30.

Parrott, W. G., & Smith, R. H.　1993　Distinguishing the experiences of envy and jealousy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 906-920.

阪井敏郎　1989　いじめと恨み心　家政教育社

Salovey, P.　1991　Social comparison processes in envy and jealousy. In J. Suls & T. A. Wills (Eds.), Social comparison: Contemporary theory and research. Hillsdale: Lawrence Erlbaum. Pp. 261-285.

Salovey, P., & Rodin, J.　1984　Some antecedents and consequences of social-comparision jealousy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 780-792.

Salovey, P., & Rodin, J.　1985　The heart of jealousy: a report on Psychology Today's jealousy and envy survey. *Psychology Today*, **19**(9), 22-29.

Schoeck, H.　1969　Envy: A theory of social behavior. New York: Harcout, Brace & World.

Salovey, P., & Rodin, J.　1988　Coping with envy and jealousy. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **7**, 15-33.

Smith, V., & Whitfield, M.　1983　The constructive use of envy. *Canadian Journal of Psychoanalytic Quarterly*, **40**, 59-82.

Tesser, A., Campbell, J., & Smith, M.　1984　Friendship choice and performance: Self-evaluation maintenance in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 561-574.

Tesser, A., & Collins, J.　1988　Emotion in social reflection and comparison situations: Intutive, systematic, and exploratory approaches. Journal of Personality and Social Psychology, **55**, 695-709.

外山美樹　1999　児童における社会的比較の様態　筑波大学発達臨床心理学研究，11，69－75.

Vecchio, R. P.　1997　Categorizing coping responses for envy: A multidimentional analysis of work-place perceptions. *Psychological Reports*, **81**, 137-138.